

マネーの変革の方向性

東京大学 柳川 範之

マネーとは何かという問いは、経済学において依然として大きな課題であるが、近年の技術革新をマネーの変革という視点でまとめてみると、一番大きな革新要素はデジタル化であろう。ただし、銀行間決済等はかなり以前からデジタル化がされており、最近になって起こったことではない。近年の特徴は、リテール分野でのデジタル化が進んだことにある。

それに加えて以下の 3 点が、マネーの変革ポイントとして考えられる。

- (1) 将来の貨幣供給をコミットする技術が開発されたこと
- (2) 情報伝達機能との親和性が高くなったこと
- (3) 取引の自動執行との親和性が高くなったこと

(1) は価値の裏付けのない暗号資産（仮想通貨）が価値もち、流通するようになった根幹の理由であり、ブロックチェーン技術の開発の結果である。しかし、ブロックチェーン技術自体は、必ずしも裏付けのない資産が価値をもつためだけに有用なわけではない。理念的には暗号資産の登場は、大きなブレイクスルーであったが、現実面においては、むしろ何らかの価値の裏付けのあるマネーが、今までとは異なった機能やサービスを担うようになった点大きい。

(2) は近年、いわゆるキャッシュレス化やビッグデータのブームの中で、特に注目されている点である。マネーがデジタル化された過程では、その利用に関する情報をデジタルデータ化して活用することは極めて自然なことで、技術的にはさほど大きなブレイクスルーではない。しかし、Wi-Fi やスマホ等のモバイル技術の進展は、決済やマネーの利用に関するデータを伝達・集積させ分析し、他産業での利用も含め多様な情報活用の可能性を拡大させることになった。その意味において、実ビジネス上のインパクトが大きい点である。

(3) は、今後の、たとえば IoT やスマートコントラクトの技術革新が進むことによって、期待されているマネーが持つ親和性である。スマートコントラクトが発展していくと、それによって取引の自動執行が実装されていくことになる。その際に決済だけが自動化されなければ、自動執行の魅力は半減してしまう。デジタル化によってマネーも自動執行に合わせて、自動決済を行う素地は整ってきており、今後ブロックチェーン技術の活用等を通じて、この面でのマネーの役割が広がっていくことが期待される。

このように、技術革新によって、マネーに本質的な構造変化がもたらされるのであれば、それは中央銀行を含めた既存事業者の戦略に大きな影響を与えると同時に、新規参入事業者のビジネスモデルを大きく左右することになる。その観点から、中銀デジタル通貨や、リベラの可能性、今後の銀行を中心とした金融機関の役割等についても考えていく。